カーネーション:「秋田の糸子」たちへの感謝を

谷口吉光（秋田県立大学）

NHK 朝の連続テレビ小説「カーネーション」がおもしろい。我が家でも夫婦でハマっている。朝見て、夜帰って録画を見て、２人でああだこうだと語り合っている。
何でこんなにおもしろいのだろう。とにかく主人公の糸子が魅力的だ。賢く、かわいく、厳しく、ものすごく心があたたかい。糸子のモデルは世界的なファッションデザイナー、コシノ３姉妹のお母さんの小篠綾子さん。大阪で小さな洋装店を営みながら、女手１つで３人の娘を育てあげた。

２月まで糸子を演じていた尾野真千子さんが抜群によかったのはもちろんだが、渡辺あやさんの脚本もすばらしい。あやさんは島根県で子育てをしながら脚本を書いているという。

糸子の魅力の秘密が知りたくていろいろ調べているうちに、NHK のホームページにあやさんの次の文章を見つけた。

「小篠綾子さんが晩年に書かれた言葉があります。『敗戦の瓦礫の中から、戦勝国も目を見張る高度経済成長を遂げ、今日の繁栄を築いた、バイタリティあふれる戦後の復興。それを支えたほんとうの力は日本中の母親たちの母性愛だったのではないか、と私は思っています。子供たちに少しでもいい暮らしをさせてやりたい。 焼け跡でほんとうに生きる根性を見せたんは、日本中のお母ちゃんやったと思うのです』」。

そうか、糸子の魅力の源は戦後のお母ちゃんたちの母性愛だったのか。納得すると同時に、ふと「今の秋田のお母ちゃんは元気なのだろうか」と思い、私はすっかり考え込んでしまった。子育て、介護、集落のつきあい、勤め、農作業などに追われ、疲れきったお母さんたちの顔が何人も浮かんできたからだ。

農業の世界では、直売所や農産加工などは女性の力に大きく頼っている。いつも笑顔で評判のある農家のお母さんは「イベントが続くと、畑や家の仕事に手が回らない」とため息をついていたし、「女の人に任せて平然としている男の人たちに腹が立つ」と怒ってもいた。

地域の若い人の面倒を見ているある人は「若い子たちは頼む時だけていねいで、後はお礼もお返しもない。小言をいえばうるさがる。面倒みる気がしなくなる」とこぼしていた。

うちの女子学生に話したら「若い人でも、何かしてあげても当然のような顔をしている人がいる。そんなことが続くと、こちらの気持ちが枯れてしまう」。

日本のお母ちゃんの母性愛は枯れかかっているのではないか。そんな気がしてきた。母はいつも周りを心配し、与え、慰め、時に叱る。そんな母を周りがわかって感謝の気持ちを表せば母の苦労は報われ、また元気になってくれる。そんな母への尊敬と礼儀が今では忘れられているのではないか。

秋田にもたくさんの「糸子」がいて、私たちを支えてくれている。母の日にカーネーションを贈るように、彼女たちに感謝の気持ちを伝えてはどうだろうか。

（朝日新聞「あきた時評」　2012 年 3 月 14 日掲載分を加筆・修正した）